基調講演　1

これからの育成会運動

全国手をつなぐ育成会連合会
会長　久保　厚子

これからの育成会運動について

全国手をつなぐ育成会連合会
会長　　久保　厚子

今までの育成会活動と成果

◎何も無かった時代に立ち上げ活動した

- 障がい児者の親や関係者でつくる会としては、今年60年を迎え、老舗中の老舗である
- 社会的に障がい者への理解や福祉の整備がまだまだであった時代から活動し、社会を変えてきた団体の一つである（知的障害者福祉法、障害者扶養共済保険制度、障害基礎年金、ＪＲ運賃割引、公職選挙法の改正、他）
- その活動は全国に広がり、全国のどこの地域にも育成会があり、作業所や施設をつくりだしてきた。

最近の社会状況

◎最近の１５年余りの移り変わり

- 社会福祉の基礎構造改革や経済不況、少子高齢化ならびに過疎化などの社会問題の多様化、複雑化など、生活や福祉を取り巻く現状の変化

⇒親の会の環境や様子も変化してきた

- 福祉サービスが整備され、情報化社会が広がり、人とのつながりが薄くなって、組織所属の依存心が薄れる
- 若い人が育成会の必要性や魅力を感じなくなった

時代の流れの中での育成会

◎組織の実態とニーズ

- 歴史と実績をなしてきた組織が急速な時代の流れに対応できずにいる
- これまでのやり方やあり方を続けようとする傾向にあり、結果として地域のニーズとの間にギャップが生じてきている

⇒これが今の時代であり、育成会でもある

- このことは、育成会だけに留まらず、学校や会社自治体・政財界など歴史と実績をなしてきた組織はそんな局面にあると言える

育成会（親の会）組織の意義

◎我が子の暮らしを思い始まった育成会

- 育成会（親の会）のように我が子の日々の暮らしから始まって活動をしてきた組織の意義は大きい
- 自分たちの組織の歴史や実践を大切にしながら、今の時代や社会・暮らしを見極めて役割を果たすことが出来れば、もっと障がいのある人が市民と共に社会参加するため の推進役になれるはず

⇒そのためには自己改革が必要！

- 実行するには、自己改革や時には自己否定も伴う

市町育成会活動の停滞化

◎若い親の入会が無い

・育成会に入ったら何をしてくれるのか

・役を持たされたり、動員されるのがいやだ

◎会員が高齢化し減ってきた

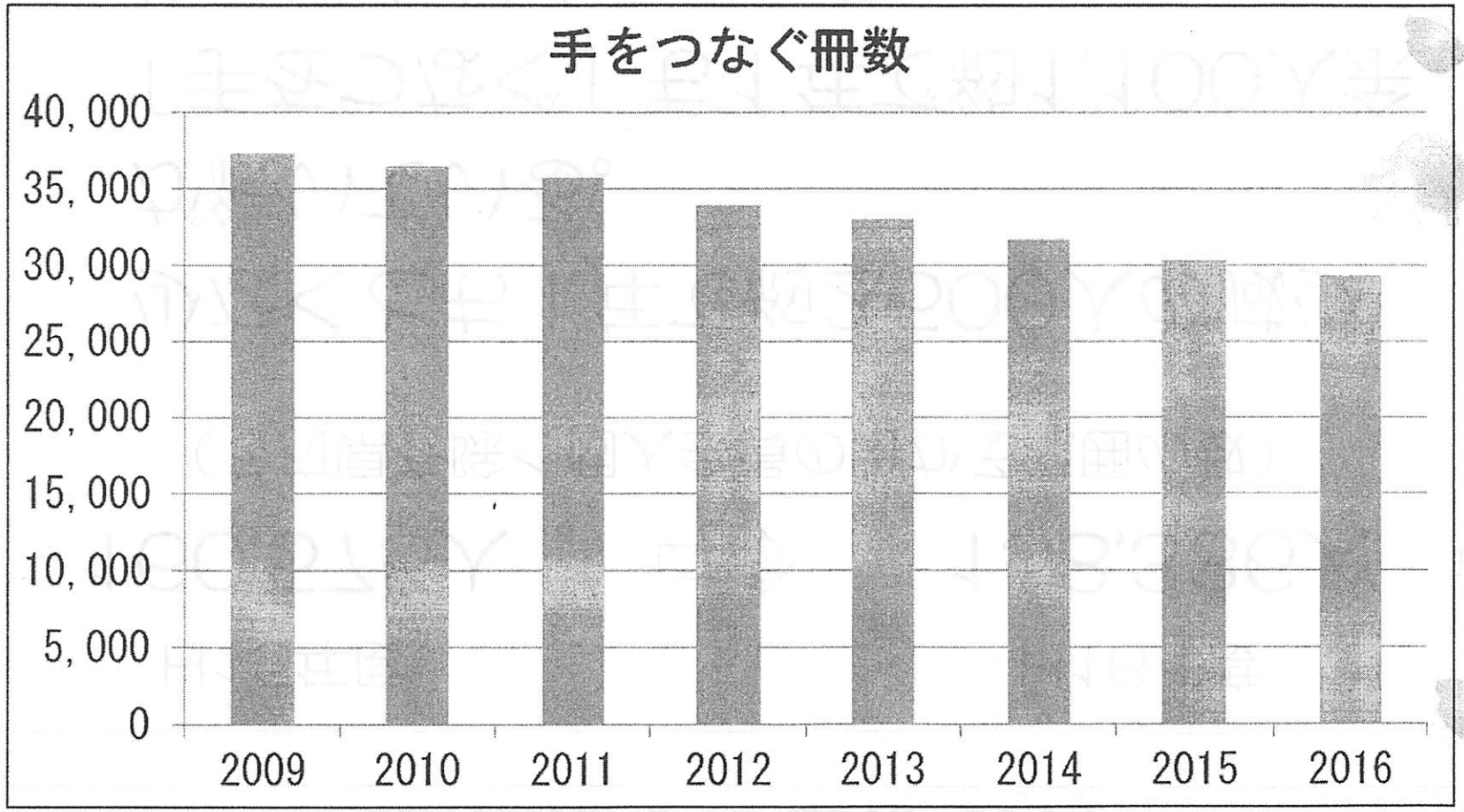
・子どもはGH（施設入所）で、親は高齢で活動に出て来れない

◎役員を代わってくれる人が無い

・若い会員は共働き

・障がいの子と、高齢の親をかかえて 活動できない

育成会連合会の会員


手をつなぐ冊数
40,000
35,000
30,000
25,000
20,000
15,000
10,000
5,000
0
2009
2010
2011
2012
2013
2014
2015
2016

正会員の会員数

H15年度　　H16年度

160,575人 ⇒ 158,336人

（５府県を除く個人会員の分かる範囲の数）

少なくとも１年で約2,500人の減少が続いている。

「手をつなぐ」も１年で約1,100人余りの減少が続いている。

組織の老朽化はどこでもある

◎長年運営してきた組織は、そのままでいると自然と老化していく

⇒対策は３つ

- 老朽化を受け入れる

「少しは抵抗」しても「無駄な抵抗はしない」⇒ 消滅に向かう

- リセットする

「個人」や「器」ではなく基本的な考え方や価値観を転換する⇒ 世代交代する

- 改革する

「新結合」「新基軸」⇒ 解散し新たに立ち上げる

立ちあがあろう！

まずこのままで良いかと気づくこと
気づいたら立ちあがること
それに共感したら支え合うこと
そして決断すること

今こそ前に進めよう！

◎自分たちの年は大過なく過ぎて欲しい

- 今こそ手をつけて改善しなけなければ、来年はもっと今よりもヒドイ状況になる。
- 自分たちの組織の意識を変えることすら出来なくて、多様性を認める社会の変革など出来ない。
- 強力なリーダーが長年居れば、その能力がいかに優秀であっても、他の役員や会員は「待ちの姿勢」になり育たない。

戦略的に考える

◎戦略思考を（意思決定）

思考（目的思考）

進むべき方向性とシナリオを決める

- 進むべき方向を決める
- 決定のプロセスを重視する
- 長期的なものの見方をする
- 未来のリスクに注意を向ける
- 大きく、重要な問題に注意を絞る
- 複数の代替え案の中から選択する

育成会の理念は

- 障がいのある人たち（我が子）の幸せを実現するための活動であるはず。

（何のための、誰のための育成会活動か）

- 組織の在り様は、その理念の実現のために、フットワーク良く、柔軟に、新しいアイデアで対応できる体制が必要。

（若い親のニーズに気づき、新たなアイデアで対応できる体制か）

この子らを世の光に

『この子らは、どんなに重い障害を持っていても、だれととりかえることもできない個性的な自己実現をしているものなのである。

人間と生まれてその人なりの人間となっていくのである
その自己実現こそが創造であり、生産である。

私たちの願いは、重症な障害をもったこの子たちも立派な生産者であるということを認め合える社会をつくろうということである。

「この子らに光を」あててやろうというあわれみの政策を求めているのではなく、この子らが自ら輝く素材そのものであるから、いよいよみがきをかけて輝かそうというのである。

「この子らを世の光に」である。』

糸賀　一雄　書より